Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-21

近代道徳劇としてのパンチ＆ジュディ　ー民衆文化から国民的伝統へー

平野，惟

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2018-03-25
(Date of Publication)
2019-03-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7229号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007229

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　要　旨

氏　名　平野 惟

専　攻　文化相関

指導教員氏名　石塚　裕子

論文題目（外国語の場合は日本語訳を併記すること）

近代道徳劇としてのパンチ＆ジュディ

――民衆文化から国民的伝統へ――

論文要旨

グロテスクな見た目をした道化的人物「パンチ」は、ピューリタン革命政府による演劇停止令の効力が残っていた王政復古間もない頃のイギリスへマリオネット劇の登場人物として渡ってきて以来、広場での祝祭や娯楽市における見世物の花形として、中世道徳劇の悪役やイギリス土着の道化との混合を経つつ、あらゆる階層からの人気を勝ち取ってきた。18 世紀後半から 19 世紀初頭ごろにかけ、社会構造の変化につれて従来の居場所であった祭が抑圧されるようになると、パンチは簡素な手遣い人形と演者が背負って持ち運べる簡易舞台によって演じられる「パンチ＆ジュディ」劇の主役となり、ロンドンを始めとする都市部の街路へゲリラ的に登場しては、妻ジュディを始めとする相手役を次々に棍棒で殴り倒すようになる。

高まる社会改革の機運を受け、新しい社会のどこへ娯楽を収めるべきかが大きな問題として語られるようになっていた当時のロンドンにおいて、上演場所や内容を柔軟に変えることのできたパンチ＆ジュディは多大な人気を博する一方、言い知れない魅力があるとはいえ暴力的であるその内容や、イメージの上で強く祝祭の無秩序さや下品さと結び付けて考えられていたことの為に、市民からは憧憬と嫌悪のないまぜになった複雑な感情をもって眺められるものとなった。19 世紀後半になると、パンチの名前を冠した風刺雑誌の登場や、子どもの娯楽としての認知の高まりを通して、ミドルクラス層を中心に言論の上でパンチ＆ジュディの暴力性になんらかの教訓を見出そうとする動きが起こる。やがて娯楽施設やリゾート産業が郊外に整えられ、娯楽が余暇活動の中に再配置されるようになると、パンチ＆ジュディは海浜リゾートの風物詩として定着し、19 世紀末ごろの家族演者の登場によって家族や地域集団の紐帯としての役割を果たすようになる。20 世紀後半にその長い歴史が注目されると、パンチ＆ジュディはついにイギリスの国民的伝統と目されるようになり、ヴィクトリア朝文化の一つとして博物館にその舞台が展示されるまでになった。

パンチ劇の特異性と強みは、常に移り変わる状況に応じて幾らでもその場で演じ直される可塑性にこそある。近年の上演において観客とパンチの遣り取りのもと物語が進められるのが常となっていることは、伝統としての自覚を持ちつつそうした可塑性をも保とうとする一つの試みであると言える。

【課程博士用】

論文審査の結果の要旨

氏　　名	平野　惟		
論文題目	近代道徳劇としてのパンチ＆ジュディ　―民衆文化から国民的伝統へ―		
判　　定	合　格　・　不合格		
論文チェックソフトによる確認	☑ 確認 ☐ 未確認　理由：		
審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	委員長	教授	坂本千代
	委　員	教授	石塚裕子
	委　員	教授	加藤雅之
	委　員	教授	西谷拓哉
	委　員	東京大学高大接続研究開発センター特任教授・名誉教授	高橋和久

要　　旨

本論文は手遣い人形と、演者が背負って持ち運べる舞台によって演じられる「パンチ＆ジュディ」劇に関する日本初の本格的研究である。

第1章において、主人公パンチの祖型がブリテン島に伝わる王政復古時代から、19世紀初頭までに手遣い人形劇パンチ＆ジュディの劇形式が確立されていく過程の検討を通して、現在伝統的なものとして認知されている劇形式が多種多様な「パンチ劇」の一形態として捉え直されている。ついで第2章では、パンチ＆ジュディの上演を初めて書き留めた1828年出版のテキストについて、劇中のパンチの敵対者たちが 1）伝統的な民俗劇や人形劇の伝統を汲むもの 2）都市生活者の不満や悲哀を反映するものの二群から成ることが論じられ、とりわけパンチの妻ジュディが、従来既存の劇を引っ掻き回す立場にあった夫を物語の主人公として定着させる重要な役割を果たしていることが指摘されている。第3章では、パンチ＆ジュディの上演記録が多く残る1820年代から50年代頃までの状況を参照しながら、社会構造の変化に伴って娯楽行動の位置付けが大きな問題となっていた当時の都市部において、手遣い人形への乗り換えによって神出鬼没の移動性を獲得したパンチ劇が、様々な演劇の場を往還しつつ状況に合わせて内容を修正することで、独自の生存戦略を展開したことが明らかにされている。次の第4章においては、バフチーンらのカーニヴァル論を参考にしつつ、19世紀に入って増加したパンチ＆ジュディへの言及や論述が改めて分析され、従来祭の無秩序や不品行と強く結び付けられてきたパンチが自分たちの生活圏内に出没するようになると、当時の都市市民たちのほうは嫌悪と憧憬の半ばする複雑な感情を処理しようとした実態について考察されている。第5章では、19世紀後半の「パンチの道徳」に関する議論や演者たちの職業化、また20世紀初頭にかけての上演状況の変化を経て、パンチ＆ジュディがイギリスの国民的伝統と目されるにつれ、それまで看取されていた両面価値性を薄れさせていく過程が検討され、さらに、演者たちが伝統としての自覚を持ちつつ、劇の在り方に一定の可塑性を保持しようと試みる現在の状況が総括されている。

パンチ＆ジュディ劇の暴力性の問題など、さらに深めることができるトピックは残っているとはいえ、学位申請者の研究はこの人形劇を大きな歴史的パースペクティヴのもとに、余暇・レジャーに関する社会学的なアプローチをも取り入れた独創的なものであり、その成果は近代英国文化研究に関して非常に重要な知見を示したものとして高く評価できる。よって、学位申請者の平野惟氏は、博士（学術）の学位を得る資格があると認める。

なお、平野氏には以下の査読付き論文3編（うち1編は近日公刊予定）があるほか、学会・研究会での口頭発表が3件ある。

・平野惟「「パンチ＆ジュディ」の形成　―パンチの役割の変容と定着―」、『国際文化学研究』第30号、神戸大学国際文化学研究科、2017年3月、65－88頁

・平野惟「Monkshavenの描写から見る *Sylvia's Lovers* における孤立と分裂」、『ギャスケル論集』第27号、日本ギャスケル協会、2017年8月、47－59頁

・平野惟「パンチ＆ジュディの「教訓」　―子ども向け妻子殺しの物語―」、『*Tinker Bell* 英語圏児童文学研究』第63号、2018年2月刊行予定、頁数未定